

日本赤十字九州国際看護大学

The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing & Graduate School

キャンパス通信 第4号 2012年10月—2013年3月



日本赤十字社九州八県支部合同災害救護訓練
傷病者とその家族役として参加した4年生

ひとりを看る目、その目を世界へ。

喜多悦子学長任期満了に伴い退任へ

日本赤十字九州国際看護大学での最後の卒業式・学位授与式を終えて

本学開学以来の12年間、うち8年間学長職を務めてまいりました私は、この春、本学を卒業いたします。ここ宗像に大学開設が決まった1990年代末、ジュネーブにあるWHO本部で紛争地の仕事を担当していた私は、自分が看護教育に携わることになるとは想像もしていませんでしたが、紛争地や途上国の保健医療が不備な地域で、人々の健康を護るために努力している看護者に強い印象を受けていました。2000年初夏、沖縄サミット前の福岡会議に参加した折、既に着任を打診されていたこともあり、まだ大学の姿もなかったこの土地を、一人訪ねました。視界の先で一羽のシラサギが高く舞いあがったのを見かけたとき、何となく導かれているような気がしました。

翌年春、知人に宛てた挨拶状には「再び教職に戻り、若者という宝石の原石を磨く仕事に就きます」と記しました。そして12年。私の宝石磨き術は如何か内心忸怩たる想いですが年々、本学は見事な原石を得ています。

Global化時代の看護学教育は、またinnovation=意識の革新=の時代にふさわしい看護を目指しています。複雑化する社会、国境のない世界で必要とされているのは、本学が目指す近代的人道的科学としての看護学とその実践です。何時、何処で、どのような状況であれ、誰にでも、そして誰とでも適切な看護を的確に実践するための基礎となるsciencesを、皆さんは本学で修得したはずです。看護師である前に良識と常識をもった社会人として、常に“HOW TO?” “WHY?” を考える力のある大人として、国際的視野のある人間として今後も育て下されるものと確信しています。

本学は、新年度、新たな学長を迎え、新たな発展に向かいます。ただひとつ変わらないことは、看護と云う人道科学をどのように担い日本と世界の不健康にどう対峙するのか、今、ここを築きたれる皆さんの行為の集積が本学の歴史になるということです。どうか、さらに、さらに真摯な研鑽を続け、その成果を大学にfeedbackして下さることをお願いします。

ご家族の皆様をはじめ、ご関係の各位に対しましては、私に賜りましたご支援ご協力を深謝申し上げますとともに、新学長と共に新たな時代を迎える本学への引き続きのご協力をお願い申し上げます。

平成25年3月12日

喜多 悦子



喜多悦子学長 「男女共同参画社会づくり功労者内閣総理大臣表彰」受賞

喜多学長が「平成24年度男女共同参画社会づくり功労者内閣総理大臣表彰」を受賞しました。

この表彰は、豊かで活力ある男女共同参画社会の形成に資することを目的に、長年にわたって男女共同参画社会に向けた気運の醸成等に功績のあった方や、各分野において実践的な活動を積み重ね、男女共同参画の推進に貢献してきた方などが表彰されるもので、昨年度受賞した「第10回福岡県男女共同参画表彰(女性の先駆的活動部門)」に続いての受賞となりました。

小川里美准教授 「大山健康財団賞」受賞



ICRCの緊急外科チームの一員として派遣された、スーダンのダルフルにて。トルコ赤新月社医療チームのメンバーとともに。左から2人目。(2007年)

小川里美准教授が、海外での医療協力に尽力した方を表彰する「平成24年度(第39回)大山健康財団賞」を受賞しました。

大山健康財団は、昭和49年に実業家であった大山梅雄氏の寄附により設立された財団法人で、予防医学研究、就中感染症研究および健康増進に関する事業を援助推進して、人類の健康と社会の福祉に寄与することを目的としています。

今回の受賞は、小川准教授が京都第二赤十字病院に看護師として勤めていた1992年に、赤十字国際委員会(ICRC)の要請を受け、日本赤十字社の国際救援開発協力要員として派遣されたケニアの病院において旧スーダンの内戦による負傷者の治療に尽力し、以来南スーダン北部の病院で外傷患者の治療、看護教育、衛生管理指導などに携わってきたほか、1999年のトルコ地震の際の救援活動及びその他の国々への救援活動を行ってきた功績が高く評価されたものです。

1年生 基礎力総合ゼミナールで文献検索ガイダンスを行いました



11月14日に「基礎力総合ゼミナール」の一環として、文献検索ガイダンスを行いました。レポートを書くための文献検索の基本的な手順を理解し、文献の正しい引用の仕方を身につけることを目的としています。OPAC（蔵書検索）やデータベースの演習を行いました。大半の学生が雑誌や新聞の記事を検索するデータベース（CiNii、ヨミダス文書館）を使うのは初めてで、興味深そうに検索を行っていました。このガイダンスは、これから学ぶ4年間の基礎となるものです。レポート作成時には、このガイダンスで学んだことを活かし、また充実した図書館環境を積極的に利用してほしいと思います。

記：准教授 石山さゆり

2年生 「福祉」と「医療」をテーマにした実習で確実に成長しています



1月半ばから約1ヵ月間、「福祉」と「医療」をテーマにした実習に取り組みました。「福祉」の実習は、病院などの医療施設以外で看護の役割が必要となる保育園や福祉施設、老人保健施設などの現場に入り、様々な職種の方と関わりながら、看護が果たす役割を考えるものです。「医療」の実習は、医療施設において2週間、1人の患者さんを受け持ちながら看護を実践するものです。前期に初めて実習を経験した頃から比べると、患者さんと積極的にコミュニケーションをとって援助に必要な情報に触れようとする姿もみられ、確実に成長しているようすがうかがえました。3年次からは、より専門性の高い知識と技術を蓄えて、一層レベルアップした実習に臨むことが期待されます。

記：助手 苑田裕樹

3年生 「看護医療の最前線」で赤十字病院長・看護部長に講義いただきました



1月15日から2月1日にかけて、3年生を対象とした授業「看護医療の最前線」において、福岡、嘉麻、唐津、長崎原爆、熊本、大分の各赤十字病院の病院長、看護部長を講師に迎え、赤十字病院の役割や特徴ある医療サービスの現状、最新の医療等について講義をしていただきました。学生にとって、地域密着型医療や救急医療、災害医療等の実際を講義していただくことは、個を対象とした臨床実習とは異なった視点で病院の役割や機能について理解を深め、将来どのような分野で働きたいのか、何をしたいのか等、キャリアデザインを具体的に考える機会となったようでした。

記：助教 伊藤てる子

4年生 日本赤十字社九州八県支部合同災害救護訓練に参加しました



12月2日、寒風吹きすさぶ中、本学を会場として行われた「日本赤十字社九州ブロック八県支部合同災害救護訓練」に4年生が参加しました。訓練は、宗像市でM7.3の地震が発生したとの想定で進められ、参加した学生たちは、模擬患者やその家族、患者搬送者など赤十字救護班に協力する学生ボランティアとして参加しました。役に徹しながらも、「骨折なのに赤トリアージはオーバートリアージだ(※)」等、「災害と看護」学習の成果を見せ、赤十字救護班として参加した各県赤十字病院の先輩看護師たちの姿に自分の将来像を重ねていました。

記：准教授 上村朋子

※トリアージとは、限られた人的・物的資源の状況下で、最大多数の傷病者に最善の医療を施すため傷病者の緊急度と重症度により治療優先度を定めること。

11月25日

アグリスクール JAむなかた農業まつり



本学と福岡教育大学、JAむなかた、JA中央会が連携して取り組んでいる「大学生アグリスクール」の一環として、JAむなかた農業まつりでジャガイモ販売を行いました。掘りたてのたくさんのジャガイモの土を洗い流し、ジャガイモ料理のレシピをつけて一袋100円で販売したところ、わずか30分で完売しました。

その売り上げ5,900円は東日本大震災の復興支援のために寄付しました。今年度のアグリスクールは天候に恵まれず農業体験がほとんどできませんでしたが、農業は自然に合わせて行わなければならないからこそ、農家の方々は自然や農作物への感謝の気持ちが強く、食べ物を無駄にしない料理を作る技術を生み出したのだということに気づかされました。

記：3年生 山崎衣織

12月14日

大学院 研究計画相談会



本日、大学院1年生7人による研究計画相談を行いました。それぞれが緊張した中で発表となりましたが、先生方のご配慮により和やかな雰囲気、領域を超えた様々な視点からのご意見をたくさんいただくことができました。10月に仮テーマを提出してから、今回初めて研究テーマとリサーチクエストを中心に研究計画書の発表を行いました。これまで研究テーマや研究方法論、研究対象者の選出についての妥当性を検討していたつもりでしたが、先生方からご質問やご助言をいただいたり、他の大学院生の発表を聞いたりすることで、研究テーマの絞り込みとそのテーマに添った研究方法について、もう一度考えていく必要があると感じました。今回の相談会を通して、研究テーマや研究方法の検討に加えて、先生方のご経験による幅広い視点からのアドバイス等を具体的にいただけたことで、自身のリサーチクエストに再度向き合うことができ、研究計画書の作成を進めていくにあたっての大きなヒントを得ることができました。今後は、先生方からいただいた貴重なご意見を検討し、更に文献検討を進めていき、より良い研究計画書の作成を目指すべく、日々取り組んでいきたいと思っております。

記：大学院1年生 ヘルスプロモーション領域 大塚亜沙子

12月18日・19日

福岡県日赤紺綬会第53回総会、日本赤十字社近衛社長 視察訪問



「福岡県日赤紺綬会第53回総会」がアクロス福岡で開催され、本学学生が、ボランティア・スタッフとして参加しました。日赤紺綬会（有功会）は、赤十字社の社業振興に寄与することを目的に設置された団体で、毎年この時期に行われる総会において、赤十字事業に多大な貢献をされた方々に対して、紺綬会会長、日本赤十字社社長、日本赤十字社福岡県支部支部長から感謝の意が表されます。数名の学生は、赤十字救護看護師の公式ユニフォームである「黒衣」を着用し、大きな舞台上で表彰状やメダルを受章される方々のご案内役を務めました。この日、特別に着用できる黒衣に、身も引き締まる思いで臨んだ学生たちは、舞台上で、頼もしくも優雅に立ち振る舞い、ボランティアながら重要な役目を務めました。紺綬会総会の翌日には、国際赤十字・赤新月社連盟会長でもある近衛忠輝日本赤十字社社長が、来校され、昨年度、救急看護認定看護師教育課程に新設したシミュレーションルームなどを視察されました。また、学生の講義を視察された際に、最近読んだ本のひとつとして阿川佐和子氏の新書「聞く力」を紹介され、「看護師にとって『聞く力』は重要。患者の声によく耳を傾け、相手の気持ちを理解できる看護師に育ってほしい。」と学生たちを激励されました。

記：総務課

だけご紹介します。

12月20日

救急看護認定看護師教育課程 修了式



救急看護認定看護師教育課程は、今年度は、7ヵ月間の教育課程になり、学部や大学院とは別に単独で修了式を行いました。余韻に浸る間もなく、数日後のクリスマスには、30名の三期生が現場復帰します。とはいえ、救急は冬が本番です。7ヵ月間で整理したこれまでの知識や、新たな考え方を、臨床の第一線で十分に発揮して下さることと思います。

長期にわたり研修生を送り出してくださった施設の皆様、ご家族の皆様、そして、講義・演習・実習でご指導くださいました、学内外の多くの皆様方に深く感謝申し上げます。

来年度お迎える四期生の合格発表も終わり、6月から講義が始まります。私たちが気持ちを切り替え、準備万端整え、新たに出発します。

記： 看護継続教育センター センター長 山勢善江
救急看護認定看護師教育課程 主任教員 増山純二
専任教員 白坂雅子

1月18日

上田奨学会記念ピアノコンサート



昭和32年、田川市(旧 田川郡川崎町)の篤志家 上田米蔵氏は、いかなる状況でも敵味方区別なく傷ついた人々を手当てする赤十字の看護師を地元福岡で育てたい、と看護学校の開設資金1,700万円(現在の25億円相当)を日本赤十字社福岡県支部(福岡市南区)に寄付され、翌年、16名の新入生を迎え、本学の前身である福岡赤十字高等看護学院(昭和51年 福岡赤十字看護専門学校に改称、以下、日赤看護学校)が誕生しました。

米蔵氏は、看護学校の開設だけでなく、看護学生の経済的支援を目的に、上田奨学会(現在の理事長は、米蔵氏の孫孫の上田康蔵氏)の設置に貢献するなど、物心両面で地元の看護師育成に尽くされました。米蔵氏の意志を引き継ぎ、令息 尊之助氏も、同校開校に合わせ、グランドピアノを寄贈されました。

ピアノは、日赤看護学校の入学式や卒業式で使用され、平成14年の閉校後、隣接する福岡赤十字病院に移設されていましたが、昨年、同院の増改築に伴い、本学1階レストランに移設されました。これを記念し、米蔵氏の孫孫で尊之助氏の令嬢 上田聖子氏を奏者に迎え、聖子氏の愛弟子である戸村千恵氏の歌、三浦聖斗氏の音響で、ピアノと歌によるコンサートを開催しました。長年、看護学生の成長を日々見守ってきたグランドピアノは、再び本学でたくさんの人々に見守られながらやさしい調べを奏ではじめました。

記：広報委員会

1月23日

英語錬成コース参加優秀者27名を表彰



英語錬成コース参加優秀者27名(のべ30名)が表彰され、喜多悦子学長より一人ひとりに賞状と副賞が手渡されました。大学名に「国際」を冠する本学では、国際人としての教養と学術的発信力を身につけることを目的に、始業前、昼休み、午後の時間に、聴解、音声・朗読、英語基礎、社交会話、学術発信、看護・赤十字関連図書読解、英語表現上達、Practical Listening & Speakingなど、学生の興味関心により自由に選択できるコースを提供しており、複数のコースに参加できます。

表彰式では、喜多学長が「本学のような英語コースを設けている大学は全国でも本学だけで、私はこのことを大変誇りに思う。世の中に看護師は約95万人といるが、英語ができる看護師はそうそう、いない。グローバル社会は英語でコミュニケーションができる看護師を必要としている。」と、激励の言葉を述べられました。また、本コース統括の因教授は、「継続してコースに参加できることがすでに、表彰を受け

るみなさんの能力の証。語学力の伸びは自分では実感したいが、前からコースに参加している人と新たに参加してきた人とを比べると、その力の違いは歴然としている。」と、継続することの重要性が指摘されました。

記：准教授 力武由美

International Activities

本学では、年間5回程度お昼の時間に「ランチョン・ミーティング」を開催しています。

2012年度の実施状況は、下表のとおりです。

月 日	テ ー マ	講 師
第1回 5/24	日赤の教育施設で唯一被災した看護学校の学生による救護活動を記録したDVD鑑賞	国際人道委員会
第2回 6/20	スーダン・南スーダン紛争犠牲者救援事業における看護	准教授 小川里美
第3回 11/8	スーダンの母と子の命を守る	NPO ロシナンテス Salwa氏、Amira氏(スーダン女医)
第4回 11/15	インドネシア5大学看護学部における国際活動	ハサヌディン大学、北スマトラ大学、 インドネシア大学、パジャジャラン大学、 アイルランガ大学の教員5名
第5回 11/20	世界初の公衆衛生大学院と連携する看護学部	ジョンズ・ホプキンス大学公衆衛生大学院 Ricky Fine 氏
第6回 1/16	国際保健・看護Ⅱ 海外研修報告— 幸せを求めるブータン王国、 タイ王国を訪ねて得た私たちの学び—	学部3年生 6名
第7回 2/22	ケニアの国および保健医療の概況	ケニア公衆衛生省 地域保健看護師 Hussein Bashir Hassan 氏

【第4回】

11月15日、JICAインドネシア継続教育システム（キャリア開発ラダー）実践コース受講のため、インドネシア共和国から来日している5名の方々を迎え、4回目のランチョンミーティングを開催しました。講演者は、首都ジャカルタにあるインドネシア大学、そして西ジャワ州のパジャジャラン大学、東ジャワ州のアイルランガ大学、スラウェシ島のハサヌディン大学、北スマトラ大学の看護学部の教員で、それぞれの大学が実施している国際活動・留学生受け入れ・交換プログラムなど、国際活動の経験について語っていただきました。それぞれの大学は、世界各地の大学や教育機関と、共同研究、ベンチマーキング、教員の相互交換を積極的に行っています。日本では九州大学、北里大学と共同研究を実施し、タイ王国やオーストラリアの大学との教員交換も実施しているとのこと。パジャジャラン大学は京都産業大学との協定による留学生交換を行っています。アイルランガ大学では4か月間の英語による看護学生向け留学生プログラムが実施されており、オランダやオーストラリアからの学生がこのプログラムに参加し、病棟や手術室での実習、英語による講義やゼミを受講しています。加えて、健康推進活動、地域のスポーツイベント、文化祭などにも留学生が参加しています。また、インドネシアの学生が、海外の大学で修士号を取得するための大学によるサポートもあるとのこと。インドネシアは日本では発展途上国だと考えられていますが、今回のランチョンミーティングで示されたように、インドネシアの大学における国際活動、留学生プログラムのあり方、留学生交換についての情報は国際的であり、今回のランチョンミーティングはそれらを知ることができたよい機会でありました。

記：国際人道委員会



【第6回】

1月16日、本年度の国際保健・看護Ⅱの研修で私たちがブータンに行って実際に見たことや体験したことを多くの人に知ってもらいたいと思い、「国際保健・看護Ⅱ 海外研修報告—幸せを求めるブータン王国、タイ王国を訪ねて得た私たちの学び—」というテーマで本学3年の学生6名はランチョンミーティングを開催しました。発表は、ブータン王国の概要、私たちが実際に見て感じたブータンの特徴、保健活動・文化交流、海外研修を通しての学びを中心に行いました。ブータンでは、物質的な豊かさだけでなく、地域とのつながりが深いことや友達・家族と過ごす時間をとても大切に、その時間を幸福だと感じる精神的な豊かさを追求しており、そのことが「幸せの国」と言われる根拠となっているのではないかと考えました。また、ブータンの民間クリニックでは、「患者を自分の家族と思って接することが大切であり、患者を第一に考えられないような人は医療や看護分野の職業を選択するべきでない」と考えられており、医療や看護の面でも精神的な豊かさが追求されていました。ほしいものを手に入れるといった物質的な豊かさによって幸福を感じる価値観を持った私たちにとって、それよりも精神的な豊かさを大切に、自ら幸福を追求していくブータンの人々の暮らしや考え方はとても刺激的でした。物質的に豊かになってきたのと同時に地域のつながりが薄くなっている日本の社会の中で、少しでもブータンの人々のように身近にある幸福を感じられるように、「精神的な豊かさ」の感性を磨いていきたいと思えます。



記：3年生 谷さおり、吉田史佳

■みんなの広場

素敵なキャンパスライフを送っている在學生に、本学の魅力、看護の魅力を探ねました。



勝山 智美さん 2012年入学 福岡県・戸畑高校出身

私は、将来、専門家としてのキャリアアップを目指して看護師になろうと決意しました。そのきっかけとなったのが、テレビで見た東日本大震災の被災地での看護師の姿です。赤十字の赤い救護服で被災者を手当てする看護師たちは、とても頼もしく見え、困難な状況においても人々に勇気を与えているように感じました。これを機に日本赤十字社にも興味を持つようになり、本学への進学を決めました。将来は、平常時でも緊急時でも、周囲の人に気遣いながらきちんと周りを見て自分から行動が出来る看護師になりたいです。

坂本 莉穂さん 2011年入学 大分県・大分豊府高校出身

4月からは3年生。毎日充実した大学生活を友達と楽しみながら、時には励まし合いながら、精一杯勉強してきたこの2年間。2月の初めには医療施設での実習があり、自分の目標に向け、受け持ちの患者さんによりよい援助を行うために学習に取り組みました。悩んだこともありましたが、先生や看護師、友達や家族に支えられ無事に実習を終えることができました。さらに、新たに自分の理想としている看護師への夢をふくらませることができました。折り返し地点でもある今を、新たなスタートラインとして、残りの2年間で今より充実したものになるよう、悔いのない大学生活を送りたいと思います！



■研究室訪問

楽しい授業を展開してくださる先生方。先生方の素顔をご紹介します。



看護継続教育センター

センター長・教授 山勢 善江

救急看護、クリティカルケア(急性期)看護が専門。
プライベートでは、4児の母親でもある。

Q:先生は普段どのような研究をされているのですか？

A:救急患者の家族への看護が主な研究テーマです。急に起こった事故や病気で、自分の愛する人が入院するというできごとは、家族に動揺を与えます。患者にとって家族は、回復のための大きな力になる人たちですので、患者はもちろんのこと家族をも支える看護が必要なのです。

Q:どんな学生時代を過ごされたのですか？

A:大学生活が楽しくて仕方がなかったです。教室の一番前の席で真剣に講義を聞いていました。それほど魅力的な講義が多かったです。いま考えると、ちょっとヒキますね(笑)。講義が終わると友達と一緒に「銀ぶら」して、大学生活を謳歌していました。

Q:看護師として医療施設に勤められていたときのご経験をお聞かせください。

A:救命救急センターに約10年勤務しました。最初は、死の場面にたくさん立ち会わなければならないことにとまどいを覚えました。一方で、反応がない患者さんにケアを続けているうちに、目が開いたり自発呼吸が回復したりする瞬間は、言葉に言い尽くせない感動がありました。人間の命のはかなさとダイナミズムを日々、肌身で感じながら仕事にあたっていました。命の瀬戸際にある患者さんやそのご家族から学んだことが今の私の看護観をつくっていると思います。

Q:在學生や受験生へのメッセージをお願いします。

A:学習を進めるうちに、看護の仕事に対して不安や疑問が沸き起こったとき、ぜひ、研究室を覗いてください。看護職者の先輩として話を聞くこともできますし、大学生の子を持つ母親として叱咤激励することもできます。若い感性を持った皆さんからの刺激を楽しみにしています。



10月1日 読売新聞 朝刊
「大学生熱い書評合戦 ビブリオバトル九州大会」
学部生5名出場、うち1名全国大会へ



12月3日 西日本新聞 朝刊
「日赤九州沖縄の支部合同救護訓練始まる」
本学キャンパスにて日本赤十字社九州八県支部が
合同災害救護訓練を実施



12月7日 西日本新聞 朝刊
「日赤九州国際看護大と西日本新聞社連携」
本学と西日本新聞社が包括的連携協定を締結



12月21日 読売新聞 朝刊
「看護師らの聖歌 入院患者癒やす
福岡赤十字病院」
病院看護師とともに学生による
ボランティア活動を実施



3月12日 西日本新聞 朝刊
福岡都市圏東部4大学学長と西日本新聞社社長との座談会



11月14日 読売新聞 朝刊
「一歩一歩前へ Dr.川原奮闘九州訪問
進む医療交流」
NPOロシナンテス代表 川原医師と
スーダン女医2名が本学を訪問



日本赤十字九州国際看護大学

The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing & Graduate School